進 路 だ よ り

箕輪進修高校　進路指導室
２０１０．１．１８
No.７６

現実と理想のギャップ

仕事に就くと、「こんなはずではなかった」と思うことが一度ならずあると思います。自分のイメージしていたものと現実とのギャップというものはどこの世界にもあるものです。結婚前は心から互いを愛し合っていると思って結婚しても、結婚後様々な現実とのギャップを感ずることは良くあることです。仕事の上でも現実はどんな仕事についても厳しいものです。現実と自分のイメージしていたものとのギャップがあるからといって、簡単に仕事を辞めてしまうなどというのはもってのほかです。

日々の生活の中には常に自分に都合の良いことばかりがあるわけではありません。また、ケーキが如何に好きでも毎日最高級のケーキばかり食べていたらいやになります。現実というものは全て自分の思い道理になるものではありません。ある程度我慢をすることが大切です。そうした中で自分の興味のわくことを探す心構えが何よりも大切です。仕事にも慣れてくると自分なりのやりがいが少しずつ見えてくるでしょう。石の上にも三年といわれますがそのくらい経たないと真の仕事の面白さも見えてこないものです。この不景気の時代に安易に仕事を辞めると次の仕事を探すことは極めて大変となるでしょう。

技術力で勝ち *事業で負け続ける日本企業*

「日本の工業技術は世界一」とこれまでいわれてきました。ところが最近はそんな日本が世界の競争に次々に敗れています。例えば、DRAM、液晶パネル、DVD プレイヤー、太陽光発電、カーナビ等はかつては日本が技術開発をし世界の最先端を走り、市場をほとんど 100 %近くまで独占していました。しかし現在はいずれも世界市場のシェアは 20 %以下でまだ下げ止まっていません。市場の拡大とともに日本のシェアは急落しているのです。世界の大きなシェアは韓国、台湾、中国等の企業に明け渡しているのです。

現在世界のトップを走る日本の自動車産業も、これから電気自動車の普及に伴い、後 15 年しない内に同じような状況をたどるのではと指摘する人もいます。技術力では世界のトップを走っていても、事業では負け続ける日本の現実があるのです。

国際競争力の評価で著名な「IMD 世界競争力年鑑」によると 2008 年の日本の総合順位は 55 ヶ国中 22 位です。1989 年から始まったこの調査で当初 5 年間は連続で 1 位であったものが、その後急速に落ちてしまっているのです。

今なお日本の技術は世界一といわれる分野は少なくありません。特許の取得件数でも世界のトップレベルです。しかし優れた技術力があれば勝てる時代ではなくなってしまったのです。ではなぜ日本の企業はこんなにも事業で負け続けてしまったのでしょうか。

日本の製造業はこれまで従来モデルの磨き上げで世界に冠たる品質とコストを実現しました。それが競争力の源泉であったのです。しかしこうした競争に敗れたアメリカはモデル事態を変える戦略に出ました。しかも常に新しいモデルを作り続けているのです。従来の延長でしか戦略を練られなかった日本はその戦略に負けてしまったのです。そもそもより高品質の製品を作れば価格は高くなります。その結果日本の市場は狭まってしまいました。世界の大多数の人々は性能は落ちても低価格のものしか買えないのです。日本は技術力をつければつけるほど自分で自分の首を絞めているのです。日本国内では高級品を作り、大きな市場は次々に外国企業に譲り渡しているのです。技術をつけることに一生懸命で、市場開拓を忘れてしまったのです。もはや日本の製品は世界の一部の富裕層しかターゲットに出来なくなりつつあります。

任天堂の wii やアップル社の iPhone は他のﾒｰｶｰの同種のものに比べスペックは落ちますが、設計思想で他を圧倒しそのシェアを飛躍的に伸ばしています。パソコンは中国や台湾ﾒｰｶｰ等が作っても一番のコアとなる CPU は独占しているインテルの戦略もあります。日本の製造業が考えなくてはならないビジネス戦略とは何かをこうしたところから学びたいものです。